

## 《特別報告》

## 「神の摂理」

——ストア派と教父思想——

樋 笠 勝 士

## 序

「善いものと悪いものについて論じようとするときにも、徳や幸福について論じようとするときにも、普遍的な自然本性と宇宙の秩序から始める以外の論じ方はないし、これ以上の適切な論じ方もない (Plutarchos, *Stoic. repug.*, 9,1035c, 以下 *Plut. Stoic.* と略記する)」。ストア派は哲学を自然学・論理学・倫理学に分類しつつも、プルタルコスが伝えるところでは、自然学から倫理学への道筋を必然的であるとしている。更には、三学問は相互浸透しながら、倫理学が目的的に理解される資料も見いだされる<sup>1)</sup>。ストア派において「神の摂理」の問題は自然学に属してはいるが、これも三学問の関係性のゆえに、倫理学の問題へと転移するものであるとすることができる。他方で、東西の教父思想においては、「神の摂理」問題について、ストア派のそれに近似した言説が倫理学的問題として多く見いだされる。そこに予想される直接的な影響関係を明示的に示せるにせよ暗示的にしか指摘できないにせよ、その近似性自体もまた問われねばならない場が必要であろう。

本稿は、「神の摂理」思想をめぐって、ストア派と教父との接合点を見いだすことを目的としたシンポジウム連動特別報告の前半部分をまとめたものである。ストア派と東西教父とが共有する「神の摂理」思想が古代末

---

1) Diogenes Laertios, *Vitae phil.* 7.40. (以下 DL と略記する) Long は三学問の中で自然学の基礎的性格を主張している。cf. A. A. Long, *Stoic Studies*, 1996, Cambridge University Press, p. 136.

期の基礎的倫理思想として成立している言説の場を明らかにしてゆきたい。

### 第一節 アウグスティヌスにおける「神の摂理」——「画家としての神」

#### 1) 初期思想において

「神の摂理 (divina providentia)」は、アウグスティヌスの初期思想から重要な思想課題であった。それは悪の起源を問うものであったからである。とくにマニ教を相手とする場合は、世界創造の原因者となる善なる神の対極に立つ如き悪の位置づけの議論を論駁するために、存在の善の思想を一層展開する必要がある、その役割を担うマニ教論駁書の一つとして『真の宗教』があった。その中で、アウグスティヌスは、身体やそれに関連する欲望の領域を、腐敗に属しているとしつつも、それでも肯定的に「最低の美 (ima pulchritudo)」と表現し、次のように言う。

「神の摂理は助けて、それらのものは悪ではないと示したのである。なぜなら、それらのものには神の知恵の数的秩序はないのではあるが、そこには最初の諸々の数的秩序の明らかな痕跡があるからである (40, 75)」。

この「最低の美」は、身体の苦しみや病気、そこでおこる不和などを多く含み、また快をもたらず感覚器官によって可変的事象にしか関わらないにもかかわらず、「美」として価値づけられているのである。この「美」は、「神の摂理」の貫徹した支配を表しており、それは、その「美」が善人を「警告し訓練する」ためであり、善人が「勝利し支配する」ことをめざすものでもある。ここから、悪人は断罪され服従するにしても、悪人の存在自体には何らかの「神の摂理」上の意義があるということになる。この意義が「美」を構成するのであるならば、上記の「数的秩序」は、身体的な次元だけではなく、「神の摂理」の及ぶ被造物全体の次元に行きわたることにならねばならない。そこでアウグスティヌスは言う。

「すべてのものは、それぞれの為すべき役割と目的とに従って、世界全体の美へと秩序づけられており、部分的にみれば恐れおののくものも、もし我々が世界全体で考えるならば、大いに喜ばしいものなのである。……我々の(判断の)誤りは(世界の)一部に縋り付いているので、それ自体嫌悪されるべきものである。しかし、絵の中の黒い色も全体と共に見るならば美しいように、不変の神の摂理は、あるものを敗者に、あるものを決然と戦う者に、あるものを勝利者に、あるものを観客に、あるものをただ神のみを静かに観想する者に与えながら、この生全体の競技を優美な仕方

で成し遂げているのである (40, 76)」。

「すべての秩序は神から由来している（ロマ 13:1）」の使徒の言葉に基づきつつ、古代哲学の伝統的秩序思想の影響の下に、アウグスティヌスは、被造物世界が、いわば絵画空間の中の対照的な配置の美的価値をもつことを明らかにするのである<sup>2)</sup>。

「神の摂理」という観点で注目すべきなのは、先ず、「全体の美」の概念である。これは部分ではなく全体への視点の転換によって成立するものである。視点の転換によって認識する風景は一変し「全体の美」が現れてくる。そこで見えてくるのは悪の価値の転換である。つまり悪が世界全体の構成の中で固有の位置を占めることの（人間にとっての）意義が示されることになる。ここから、次に「部分」の意義、部分の位置づけ、或いは有用性という点が重要となる。それは絵画制作のメタファーとしての役割が大きいとしうる。黒色は、その色の意義を知る画家が作品全体を価値あるものにするために自覚的に配置したものである。この黒色を意味あるものとして作品全体を仕上げるためには、画家に固有の能力（τέχνη, ars）が必要であろう。そして画家の優れた能力のうちに妥協なき作品創造の力を見ることになろう。ここから、第三に、「神の摂理が助ける」・「(醜が)許されない」といった箇所を示される、「摂理」において示される創造者の意志的契機である。擬人化された「神の摂理」は、決して単純な意味での「計画」や「予知」のような知的なものに留まるものではない。作品の完成度から遡及的に求められる作者の力、すなわち念入りに作品を仕上げ製作しようとする作者の技術的な能力や、作者による作品への特別の配慮といった意志的視点が暗示されていると見る事が出来る。

## 2) 中後期思想において

さて上記のような言説が中後期思想にも見られることを確認したい。

『神の国』では、アウグスティヌスはオリゲネスの世界創造への理解が、罪に応じた段階的連鎖的創造という理解であるがために、世界創造は善の創造ではなく悪の抑止のためであったとオリゲネスを批判している箇所がある。彼は言う。

2) *De Ordine*, 1.7.18.「この秩序と配置とがあるからこそ、——これが善悪の区別によって宇宙の調和を維持しているが——悪もまた必然的に存在するという結果になっているのである。このようにして、或る仕方ではいわば対照法によって——これは弁論においてもわれわれに心地よいものだが——、つまり対立するものから、同時に万物の美が形成されるのである」。

「悪しき意志も、本性の秩序を守らなかったからといって、義なる神の、すべてを善に秩序づける法を免れないのである。というのも、黒い色が然るべき所におかれた絵画と同じように、すべてのものもまた、それを見通すことのできる者がいるなら、罪人がいても——罪人は、彼らだけを切り離して考えると、その醜さによって汚すものではあるけれども——美しいのであるから<sup>3)</sup>」。

身体や物体だけでなく、魂における悪についても、アウグスティヌスは明白に神の秩序の下にあることを示すのであるが、そこに、少なくとも次の諸点、すなわち、被造物全体への視点の転換、絵画的なメタファーによる作品全体への価値観、その対照性の肯定的評価があることは明らかであろう。ここから、このような秩序思想は、その思想内容の強調点の差異は措くとして、アウグスティヌスの思想全体の少なくとも通奏低音的な役割を果たしていると言うことが出来るであろう。これをもう少し明確にするためにほぼ同時期の文書を見ておきたい。

『説教』301は「マカバイ記二」7における7人兄弟とその母の殉教をめぐり内容であるが、アウグスティヌスは、暴君アンティオコスのような不義なる人を念頭に置きつつ、「詩篇」37:35-6を引用し、主に逆らう者の横暴と権勢を見るものの、時が経つと「彼は消え失せ、彼を探しても、その場所はみつからなかった」という一節に依拠しつつ、次のように言う。

「君は彼の場所を探し、見つける。だが、それはこの世である。彼はこの世とこの世界のうちに自分の場所もっているのである。実際、神の予知によって、彼も無為に造られたのでもないし、また無為に育てられたのでもない。また無為に、太陽が彼の上に昇り、雨が彼に降り注いだのでもない。彼の悪意や悪しき生が神の無限の忍耐によって無為に容赦されていたわけでもない。これらは無為なものではない。彼は自分の場所もっているのである。たとえば我々がすべてを見いだすことができなくても、それでも神にはすべてが知られているのであり、神はあらゆるものを配置するすべを知っているのである。さあ、他のことには黙すことにして、この哀れなアンティオコスがこの世でどのような場所もっていたのかを見ることにしよう。彼によって、神の人々は鞭打たれ試されたが、彼によって、これらの聖なる若者たちは冠を授けられたのである。だから、彼はこの世

---

3) *De Civitate Dei*, 11, 23, cf. *ibid.*, 11, 18. 「対照法」によって「言葉の雄弁」の美が成立するように、善悪の対照によって「事物の雄弁」が成り立つとも言われている。

に自分の場所をもっている。彼は悪人であったが、悪であることのできない者が、彼をよく用いたのである。実際、悪人が善い被造物を悪しく用いるのと同様に、善き創造者は悪人を善く用いるのである。人類全体を創造した者は、そこで何を為すかについて知っているのである。金細工師が(素材を)持ち込んで、重さを量って、平衡にする。画家は黒い色をどこに置くかを知っている。それは絵画が美しく飾られるためである。だから、神が、被造物が秩序づけられるために、どこに罪人を置くかを知らないということがあるだろうか (*Sermo* 301, 5, 4)。

アンティオコスがこの世でもっていた「場所」を考えること、これはアンティオコス自身に注目するのではなく、この世の全体からアンティオコスの位置を見ることである。ここから分かるのは、黒い色は他の色との対照によって作品全体に調和をもたらす意義ある色であり、それが画家の自らの創造行為への把握の下に実現しているということである。全体を構成する部分に関して、「自分の場所をもつ」とは世界の展開の中で固有の役割をもつということであり、他方、全体を構成する創造者においては、「(黒い色を)よく用いる」、つまり美的な作品創造のために諸部分を配置するということなのである。

以上、「画家としての神」を通じて「神の摂理」の概念を構成する要素を見てきたが、もちろんこのような「画家」の言説は、決してアウグスティヌスに特有というわけではない。少なくとも世界創造が作品制作として捉え直されている視点として教父思想に於いて手がかりにはなると考えられるのである<sup>4)</sup>。

## 第二節 「作品の美と作者」の言説——ストア派の場合

第二節においては、第一節にてとりあげた「神の摂理」に関する三つの論点を中心にして、それらがストア派と共有するものであることを確認したい。

---

4) 「画家としての神」の神概念については、アンブロシウス『ヘクサエメロン』6.7.42 (pictor), オリゲネス『創世記註解 (*Hom. in. Gen.*)』13.4 (ζωγράφος) を参照。なおアウグスティヌスの場合は『真の宗教』と共に『秩序論』(1,1,2)の論述に準拠した関係で、絵画はストア派的な影絵 *σκιαγραφία* というよりも静止したモザイク画 (emblemata) を念頭に置いて考察した。

## 1) 宇宙の美について

ストア派にも神義論として、宇宙を、完全に調和したもの、或いはそこに欠陥がないことを、彼らの宗教心に沿って強い称讃と共に主張するところがある。それは「宇宙の美 (*τὸ κάλλος τοῦ κόσμου*)」を称讃するものである。

ポセイドニオスは言う。「美しいもののうち何ものも無為に偶然に生じているものではなく、なんらかの技芸によって生じている。宇宙は美しい。これは、形や色、宇宙を巡る星々の多彩さのゆえに明らかである。……実際、宇宙は、様々な動物や樹木のように、同じ種類のあらゆる事物を含んでいるが故に美しいのである。またあの天の現れも宇宙の美を全うしているのである (*Aetius, Placita*, 1, 6.)」。

ストア派における「万物の美」についての典型的描写がここにある。それは宇宙自体の形の完全さとそれに包含された事物の種類の豊かさを示している。宇宙全体と共に、動物や樹木にも言及するのは、やはり全体と部分を考えているからであろう。形や色、大きさの各々における美への言及も、自然洞察から生じる生命の多様性を表す視点を意味しており、そこから、大きな単位の美は小さな単位の美と、生命的類比性を以て同質的に捉えられる可能性を示している<sup>5)</sup>。このような描写の中で重要なのは「美」を構成する「多彩さ (*ποικιλία*)」であろう。「多彩さ」が称讃されるのは、その「多彩さ」が創造者の「技芸 (*τέχνη*)」によって巧みに構成された秩序的な作品だからである。従って、宇宙という作品は完全な作品と見なされることになる。

「(クリュシッポスは言う) すべてのものは最善の自然に従って造られているのであるから、宇宙の中には非難され責められるものは何もない (*Plut. Stoic.*, 37, 1051b)」。キケロもクリュシッポスを代弁する。「実際、何も欠けるものがなく、至るところで相応しく備えられ完全であり、しかもそのあらゆる秩序 (数) と諸部分において完璧なものは、(この) 宇宙以外には何一つない (*Cicero, De nat. deor.*, 2, 13 37, 以下 *Cic. nat.* と略記する)」。

ロングによれば、ストア派は特殊な自然現象を観察することで、その経

5) ストア派の自然学的観察は広大な天体はもちろんのこと、日常的には些細なことでとされるような事象の例を、しかし一層積極的に挙げてゆく。小さなものでも合理性があることで *a fortiori* の論法を活用していると言える。

験が彼らに目的論的な説明を求めさせたとしている<sup>6)</sup>。序で述べたように、ストア派にとって、哲学的考察の基礎は先ずもって自然の探求にあった。あるがままの自然をそのまま肯定し、のみならず称讃する価値意識をもつのは、自然が芸術的な創造者たる神として仰ぎ見られる最善の存在であり、知恵と知性を有していると考えられるからである。ここにおいて自然学は倫理学と連なることになる<sup>7)</sup>。

## 2) 部分の位置づけ或いは有用性について

全体を構成する諸部分が、全体に寄与するしかたで「美」を実現するためには、各部分において意義ある位置づけがなされていなければならないであろう。しかし、その位置づけについては、ストア派の言説は多様であるように思われる。「神の摂理」に関わるかぎりでは代表的なものを分類しておきたい。

①「(クリュシッポスは『自然について』の論考で次のように書いた) 自然は美を目的にして多くの生き物を生みだしてきた。なぜなら、自然は美を愛し、(色や形の) 多彩さを喜ぶからである。——そして彼は最も不思議なことをその後付け加えるのだが——孔雀は、その尾の美のゆえに、尾を目的として生まれてきたのである (Plut. *Stoic.*, 21, 1044c)」。

前半は、宇宙の全体美を説明するものであり、「多彩さ」と「美」の結びつきを確認できる。後半は、宇宙の中の生きものの事例ではあるが、確かに孔雀の事例は、プルタルコスも指摘するように違和感が拭えないであろう。しかし、宇宙の包含する事物の一つとして色や形の生命的な多彩さやそれらの目的論的意義の事例になっていることは受けとめられる。その事例では、宇宙の中での部分(孔雀)の存在意義と、全体(孔雀)の中での部分(尾)の存在意義が考えられうるが、何れにしても、これは宇宙の中に無為なものはないとする「全体美」の考え方に沿うものであるという。

②「(クリュシッポスの考えは説得力があった) すなわち神は我々を、我々自身とお互いのためにつくり、動物を我々のために造った (Porphyrios, *de abstin.*, 3, 20)」。この一節に続いて出てくる例は、戦うた

6) A. A. Long, *Stoic Studies*, Cambridge University Press, 1996, pp136.

7) Cicero, *De nat. deor.*, 2, 13, 36; 14, 39. 「宇宙が知性と知恵を有するのは必然である。……宇宙以上に完全なものはないし、徳以上に優れたものもないことから、徳は宇宙の属性であると言える」とキケロは解釈している。

めの馬、狩りのための犬、勇気の訓練のための豹や熊や獅子、その他食用の動物である。これらは自然の産物が人間に役立つという実際の視点をもつものであり、宇宙に配置された諸部分相互の有用性の関係を示している。孔雀の例は、その尾との関係については幾らか合理化の側面が強いことは否めないが、上記の例は、既に通用している社会的事実の有用性であり、いわば現実を追認する仕方論じられた人間的有用性である。この種の事例の特徴は、更に人工物において一層顕著になる。

「(クリュシッポスは次のように言う) 盾カバーは盾のために、鞘が剣のために造られているように、宇宙以外のあらゆるものは、別のもののために造られている (Cic. nat. 2, 37)」。

鞘や剣に加えて、大地の実りや果実、動物などの例、さらには、これらのものが人間に役立つ一方で、人間自身は「宇宙を觀照し模倣するため (ad mundum contemplandum et imitandum)」に生まれてきたと説明されており、先の例よりも事例の範囲が拡大していることがわかる。その有用性の議論は確かに人間中心的ではあるが、それでも人間は宇宙の成員として一定の役割が与えられた部分であることが示されている。ストア派は、宇宙全体の中に觀察される生きものの「多彩さ」を、このような有用性の関係を見いだすことで目的論的に理解し、秩序的な宇宙觀を手に入れるのである。

③「(クリュシッポスは言う) 多くの重要なものを自然は産みだし、きわめて適切で有用なものとして整えたときに、これら自然の造った作品と直接結びつく、他の不都合なものが同時に生まれてきたのである」。例えば、自然が人間の身体を造る場合に「理性の向上と作品の有用性」の故に、頭部がきわめて薄い城壁でしか守られず、小さな打撃や攻撃によっても壊れやすいものという結果を引き起こしたという説明がある。こうして「病氣や疾患もまた健康が生み出されたのと同時に生まれ」、「徳が自然の配慮によって人間たちに生じたのと同時に、反対の結びつきによって、悪徳も生まれた」とされるのである (Gellius, Noct. Atti. 7, 1, 7-13)。

ゲリウスは、この創造上の副産物の出現について、「ある必然的な帰結によって (per sequellas quasdam necessarias)」と表現しつつ、ストア派の用語として「副次的な帰結によって (κατὰ παρακολούθησιν)」という言葉を用いている<sup>8)</sup>。この παρακολούθησις の概念については明白ではないが、

8) Arist., APo. 99a30. なおゲリウスは、sequella の概念を natura/providentia と対立



部分の位置づけに関しては、この概念と共に出された「反対の結びつき (adfinitas contraria)」が重要である。部分としての「悪」は、自然の創造のうちで「善」と共に生じる必然的副産物であり、その根拠が「反対の結びつき」にある。これが善悪の対立という総括的主張に展開する言説もある。「善は悪の反対であるから、どちらも互いに対立しながら存在しなければならず、いわば相対立する相互依存に支えられて成立しているものである<sup>9)</sup>」。

対立に関する言説はストア派に多い。例えば、文法での母音と子音、音楽での高音と低音 (Plutarchos, *de Tranq. animi*, 474), 治療に役立つ毒・ソクラテスの正義に役立つメレトスの悪・自制心に役立つ放埒 (Plutarchos, *de comm. not.* 13), などである。相互対立するものが、自然科学的な事象だけでなく、それを基盤にしつつ倫理的な事象の両極にまで至る考え方を支えるのは、対立物が存在することで結果する全体美への前提的価値意識のゆえである。つまり、対立という構図の示す「対照性」の秩序 (美) への全面的な依拠である。それはクレアンテースのゼウス讃歌にも現れている<sup>10)</sup>。従って、そこで示される対立的な有用性も諸部分相互の合理化・正当化として語られることになるから、「神の摂理」における言説は、どうしても現実的な事象の追認的・信任的説明を繰り返すことになる。クリュシッポスの発言として伝わる「悪は、ゼウスのロゴスに基づいて、懲罰のために、あるいは宇宙全体に関係づけられる別のはからいに基づいて配分されていると考えねばならない」や「(悪徳は) 全体との関係では、そういつてよければ、無益ではない仕方では生じているのだ。それがなければ善いものもなかったらうから」についても (Pult. *Stoic*, 35), 秩序思想を根拠にした合理化の公式見解として理解されてくるのである。

### 3) 作品創造における作者の力と配慮

「ゼノンによれば、自然は手順に従って生成に向かって進む技芸的な火であると定義される。彼によれば、創造することと生むことは、技芸

---

するものと伝えており (6, 1, 9), 文脈上, sequella が, (不可避的な) 随伴結果と解されることから, ストア派の「運命」の概念と重なることとなる。cf. Gretchen Reydams-Achils, *Demiurge and Providence*, Brepols, 1999, p. 76.

9) Gellius, *Noct. Atti*. 7, 1, 1-6, cf. Pl. *Pd.* 60c

10) Stobaeos, *Ecllog.*, 1, 1, 12. 「このようにして, 善なるものを悪しきものと釣り合わせつつ, すべてを一つにする」。

(ars)に固有の営為であると考えてるのが最も相応しい。他方、我々人間の手が携わる技芸的な作品は何であれ、自然が——今述べた諸々の技芸の師である技芸的な火が——、遙かに技芸的に成し遂げるのである。自然はあらゆる点で技芸的創造力をもつのである。なぜなら、自然は、いわばある種の道と、従うべき方法をもつからである (Cic. nat. 2, 22 57.)。ここでいう「技芸的 (artificiosus)」とは、ストア派の自然学的な概念である「技芸的な火 (πῦρ τεχνικόν)」や「技術的な形成力をもつ氣息 (πνεῦμα τεχνουίδές)」に由来する創造する自然を表すものであり (DL 7, 156.)、「技芸的創造力をもつ者 (artifex.; Cic. nat., 2, 22 57)」, 「技術者 (τεχνίτης.; DL, 7, 86)」とも呼ばれている。自然は創造者乃至作者であり、所産としての宇宙は被造物であり美しい作品である。この考え方も現実の人間的生活から採られ類比的に適用されている。「自然は、人間の職人仕事から明らかかなように、有益性や快楽をめざしている (DL, 7, 148.)」。人間的な職人技によって造られる作品は、その作品の美的完成度の高さの故に、作者への視座の転換の契機となる。それと同じようにこの宇宙の美も創造者への視座への転換を促すのである。「作者によって造られた作品はいつも何らかの仕方で作者を表すしとなるのが本来の姿である。なぜなら、彫像や絵画を見て直ちに彫刻家や画家を思い浮かべない人は居るであろうか。……いかなる技芸による作品においてもひとりでにできあがるものは何もない。さて、この宇宙は、最も技芸的に造られているので、知識の点で優れ最も完全なる者によって、仕上げられたということになる<sup>11)</sup>」。ここでは、作品としての宇宙は人間による技芸的作品と類比的に等置され、構造的類似性が示されている。作品は、作者の創造的表現の「しるし (γνωρίσματα)」として、観照者をして作者の観念を生じさせ、そして作者への反省的遡行を促すのである。創造された作品が完全性を備え、技芸的産物としての価値をもつという意味で「美」として表現されながら、同時にその「美」が記号として「美」の起源となる作者を指し示すことになっているのである。こうして作品の「美」への讃美は、作者の讃美への視座を開くのである。従って美事な作品がなんらかの有益性や快をもたらずのならば、そのような作品の作者には、完成に至るまでの創造上の配慮が

11) Philon. *De monarchia*, 1, 216M. なお, Cicero. *De nat. deor.*, 2, 13, 35 によれば, 宇宙の中の個々の事物にそなわる一定の本性の説明において, 葡萄や家畜のような自然物に加え, 絵画や工芸品の例が挙げられ, そのまま自然全体へと視線が移り, そこで完成と完全が見いだされる, とあるように, 部分から全体へ, 創造者へと遡行する過程がある。

あったとされ、意志をもって創造したと考えられてくる。「自然は人間の利益と有用性のためにこれほど豊かな実りを授けてくださったので、生み出されるものは我々に意図的に与えられたものであって、偶然の産物とは思われないほどである (Plut. *Stoic.* 9, 1035c)」。技芸の能力と配慮乃至意図は一体的と見るべきであろう。人間的作者が作品の完成度を高めるべく念入りに作品を仕上げてゆくその作品への眼差しには計画性や注意深さもあるであろうが、最も重要なのは、作品創造に全霊を注ぎ込む集中した創作的精神であろう。それと同じように、自然／神は、「思慮」或いは「摂理」と呼ばれる宇宙の精神として、「何よりも先ず配慮し、強く気にかけているのは、先ずは宇宙が存続するためにできるだけ適正であること、次に何もかも欠けるものがないこと、そして何よりも最高の美しさと装飾のすべてが実現していることである (Cic. *nat.* 2, 22 58)」。

### 第三節 東方教父とストア派——バシレイオスの場合

本節においては、「神の摂理」の三つの論点について、東方教父バシレイオスの『ヘクサエメロン (*Homilia in Hexaem.*)』の場合において概括的に検討し、東方教父哲学への間接的な浸透の度合いを確認したい<sup>12)</sup>。

#### 1) 全体の美 (宇宙の美)

バシレイオスは言う。「理由のないものは何一つない。偶然によるものも何一つない。すべてのものは言い表しがたい或る知恵をもっているのである。いかなる言葉がそれを語ることができるのであろうか。どのようにして人間の知性は正確にこれらすべてに至れるのであろうか。それは、事物の個々の姿を見通すためであり、また一つ一つの事物同士の相違を明白に識別するためであり、更には隠された理由を余すところなくあらわにす

12) ストア派の影響をバシレイオスにおいて明示的に証明するのは難しい。古くは Y. Courtonne の研究 (*Saint Basile et L' Hellénisme*, Paris, 1934) があるが、『ヘクサエメロン』に関しては *πῦρ τεχνικόν* を中心にした簡単な比較研究 (p. 81ff) に留まる。他方『ヘクサエメロン』は内容上プラトン『ティマイオス』とアリストテレスの自然学系著作の影響は多く見込める。ストア派に関して、その関連を間接的に示せる箇所が多いのは、新プラトン主義を経由したストア派の影響の可能性が大であることを示しているように見える。cf. S. Hildebrand, *The Trinitarian Theology of Basil of Caesarea*, Catholic University of America, 2007. David G. Robertson, "Stoic and Aristotelian Notions of Substance in Basil of Caesarea," *Vigiliae Christianae* 52. 4 (1998): 393-417. L. J. Swift, "Basil and Ambrose on the Six Days of Creation," *Augustinianum* 21 (1981): 317-28.

るためであるのだが (5, 8)」。この引用から分かることは、神の作品としての被造界は完全であること、その被造界は知恵を有していること、(その知恵の内実として) 宇宙の中の諸部分は各々の存在に理由をもっていること、(その理由の内実として) 諸事物同士の間は何らかの関係性があること、その理由を人間知性は探求するが隠された理由もあること、そして以上の言説の基調として全体的に称讃的な傾向があること、などである。これらの論述は、影響関係は問えないものの、事柄としてはストア派の言説やアウグスティヌスのそれと同じ方向性を持つと言って差し支えないであろう。所産としての現世に偶然や無為を考えない姿勢は「神の摂理」を語る基盤となる。

「こうして存在する事物においては摂理のうちにないものは何もないし、それらの事物に携わる配慮による持ち分を失っているものも何もないのである。もし君が動物の肢体のことを考えるならば、君は、創造者が無意味なものを何も付け加えず、また必要なものを何も省いてないことを見いだすであろう (9, 5)」。このテキストでも「摂理」は万物を包含していると共に、「摂理」は「配慮」という意志的な契機を含むことが明示されている。そして、そこに各事物の「持ち分 (μοῖρα)」があり、そのことによって、無意味なものが一切無い完全無欠の被造界が考えられている。また「必要なもの」とは創造者が意図した必要性であり、我々人間にとって不分明でも、既に「必要」として見なす合理化の契機を予想できる。これは「動物の肢体」の例で明らかである。ストア派でも同様であるが、自然科学的な観察の筆頭として生きものの身体的観察は、万物の浸透する「摂理」の把握の最前線であると言ってよい。

「もし身体の美が諸部分相互の対称性によって、そして美しい色の現れによって、その存在をもつのであるならば、本性的に単純であり且つ類似した諸部分をもつ光の場合、どのようにして、美という考え方が保たれるのであろうか (2, 7)」。全体美の実現のためには諸部分相互の関係性の価値が必要である。ここでは古代ギリシャ思想の伝統的な対称性 (συμμετρία) の美的価値が提示されている。対称性の美的価値観はストア派と共有するものではあるが、ただ、上記のテキストの問題意識はプロティノスのそれとの類縁性の可能性が高いと思われる<sup>13)</sup>。東方思想では新ブ

13) プロティノス (*Enn.*, 1, 6, 1) は、バシレイオスとほぼ同じ問題提起をしている。対称性の調和的美を実現するためには、全体を構成する複数の要素が必要であるが、これに

ラトン主義を経由したストア派の影響を一層考慮せねばならないであろう。

## 2) 部分の有用性

部分の有用性に関して、バシレイオスは比類のないほど多くの事例を用意していると言ってよい。創世記の中での、例えば動物への言及があるときには、直ちにライオンや蛇やらくだ、その他動物の牙や歯や姿形の例を通じて、彼は諸部分がそれぞれどのような役割を果たしているのかを詳細に説明し合理化しようとする。それはストア派の孔雀の例に似てはいるが、バシレイオスの方が一層素朴で、しかも実際の自然学的観察の結果を実証的に記している印象をもつのである。例えば、大地の芽生え（「創世記」1:11）において、彼は、同時に様々な樹木の生長を語るが、その種類は、果実を生む木、屋根などの素材を提供する木、造船に寄与する木、という風に実際の観察事例を数多く出す。また「同じ水が、また葉になり、大きな幹や小さな幹に分配され、果実の生長を産む（5, 7-8）」のように観察に基づく現実的な生を追認するかのように説明する<sup>14)</sup>。

## 3) 作者の技芸的な力と配慮

### ① 技芸的な力

「創世記」1:2の「地は見られずととのわなかった」について、バシレ

---

対して、この箇所では、光は部分を持たず単純であり、「一」なる美を実現している場合の説明に妥当すると思われる。

14) 対称性についてであるが、校訂版による参照箇所として提示されたストア派イオスによるストア派断片は、身体の熱と冷、乾と湿、などそれらの対称的な自然学的事物の「混合」を次のように示している。「身体の美しさが、身体にそなわる肢体相互の、また全体との関係での均斉であるように、魂の美しさも、ロゴスとロゴスの部分との、魂全体に対してと相互に対しての均斉である (Ecl. 2. 62. 5.)」。諸部分相互の対立的対称性の点と、部分が全体に対する有用性という点とが、あまり明確に区別されないまま、全体美を構成しているようである。Cf. Basileios, 2. 4. なお悪について、バシレイオスは善悪の対立の美という考え方を採らず、悪は「徳に反対する魂の状態 (διάθεσις ἐν ψυχῇ ἐναντίως ἔχουσα πρὸς ἀρετήν) であり、「美からの頹落 (ἡ ἀπόπτωση ἀπὸ τοῦ καλοῦ)」と考えている。「悪の起源を神とする」と言うのは不敬である。なぜなら、反対のものは、その反対からは生じえないからである。……創世記において、おのおのの存在は自らに似たものから生じているのであって、反対物からではない。……悪は徳に反対する魂の状態であり、美なるものから離れ落下することによって、配慮なきものに至った状態である」。なおストア派の影響については、生の出来事について、老齢化のように自然に生じるものと、予期せぬ偶然に起こることと、我々に力があって (ἐφ' ἡμῶν) 起こることと三種に分けている点が挙げられる。またこの箇所については、マルクス・アウレリウス (Med., 2, 11ff) との類似が指摘されている。Cf. L. V. Jack, *St. Basil and Greek Literature*, Catholic University of America, 1922, pp. 110.

イオスの論述は、神の創造以前に質料の先在を主張する一派に対して反論するものであるが、彼は、論駁する相手が、神の技芸を人間的な技芸に基づいて考えているとして批判している。ここで注目したいのは、その技芸の区別の問題（質料が先在するいか否か）ではなく、バシレイオスはいずれに対しても「技芸」の概念自体を共通に認め、神の創造を「完全なる技芸」の実現と見なしている点である。

「(実際、彼ら(論駁する相手)の人間の本性の貧しさが、彼らを欺いたのである)我々人間のもとでは、各々の技芸は、ある特定の素材において限定的な仕方では為される。例えば鉄において為される鍛冶屋の技芸、木材において為される大工の技芸である。……しかし、神は、今見られる事物のどれもが存在する以前に、自ら直知するに至り、非存在を生成へと導くようおしすすめた。それと同時に、神はどのような宇宙が存在するべきかを洞察すると共に、宇宙の形相と共に、それに相応しい質料と共に創造したのである。……神は宇宙の全体を——これは相互に異なる部分によって成り立っているが——、愛の何か不壊の法によって、一つの共同体と調和へと共に結びつけた。その結果、場所の点で互いに最も遠く離れておかれたものでも、共感的な感応によって、一体となって造られているように見えるのである<sup>15)</sup>」。

質料の先在の問題を除けば、バシレイオスは神の技芸の力を、質料と形相の創造及び愛による創造の説明によって表そうとしていることが明らかであろう。他方、「完成された作品」の概念自体は、人間の技芸の場合でも神のその場合でも同じである。観照者には作品内部の諸部分が相互に疎遠であるように見えても、作者にとっては、緊密な関係を持っていると洞察し製作し仕上げるものである。従って観照者も作品に対しては完成されたものとしてみなし、諸部分に異を唱えないのである。引用文の後半は、このような観照者の立場を表しており、「神の摂理」の基本的な立場をつくっているとと言える。

## ②配慮

作品を完成された作品と見なすのは、作者の技芸の力に信をおいているからである。同時に、作品に込められた意味（創造の意図）を作者に帰属

15) *ibid.*, 2. 2. なお、文中の動詞 *συναπογεννᾶν* は、プロティノス (6. 6. 2) にも現れる語である。また、*κοινωνία* 及び *συνπάθεια* の語については、ストア派の断片 (Philo. de migrat. Abrah. 178-180) としての「(万有の創造によって遠く離れたものでも) *κοινωνία* と *συνπάθεια* によって宇宙の調和 (*συνφωνία*) が生まれる」との関係が問われてくる。

させて、押し量ろうとする。それと同じように、被造物である人間は、宇宙を創造した者を、「神の摂理」の立場に立って、当然のように神を称讃することになるだけではなく、そこに宇宙の存在の意味、創造の意図をも見ようとするのである。

「驚くべきものをつくる偉大なる創造者、そして芸術家である主よ、主が、ご自分の作品の表しているものへと（我々が至るように）我々に呼びかけているのに、その我々が、観照することに疲れていたり、また霊の語る言葉を聞くことに躊躇しているのではよいのであろうか。我々は、むしろ、神の創造による広大で多様な匠の場を前にして立ちどまり、各々が遠い過去の時に思索によって思いを運ばせて、万物全体の秩序を見通すべきではないだろうか（4, 1）」。

「作者である神<sup>16)</sup>」は作品創造を通じて人間に呼びかけている。人間の任務は、それに呼応して、作品に現れている多彩さを、秩序として見ようとする生を保つことである。それは、地上の、どんなに小さく価値が少なく見えるものでも、それでも秩序として見ようとする姿勢を作り出す<sup>17)</sup>。

「〔卵からひなをかえすには七日かかる）つぎに、ひなには、成長するために食べ物が必要なので、神はもの惜しむことなく、きわめて小さなこの生きものにさらに七日を与える。船乗りはみなこれを知っていて、この日々をアルキュオンの日々（冬至前後の穏やかな日々）と呼ぶ。神の摂理がこのような理性を欠いた生きもののことを定めたのは、これらの小さな生きもののことが、君に、救いに至る道のことを神に尋ねるよう勧告させるためなのである。そんなに小さな鳥のために、広大で恐ろしい海がおさえられ、冬の中にも穏やかであるように定められたのであるから、神の像にしたがって造られた君のために、どんな驚くべき事も起こらないとしてよいのだろうか（8, 5）」。

小動物への自然学的観察から、「神の摂理」のきめ細かい秩序を引き出す営みは、ストア派と同一歩調をとるものである。さらに、被造物の観察から創造者の意図への内省的な転回もストア派と同じ路線に立つと言える

16) 「作者」を表す語彙は多い。ὁ κτίσας, ὁ μέγας θανματοποιός, ὁ τεχνίτης, ὁ δημιουργός, ὁ ποιητής, ὁ κτίστης, などがあるが、この語彙の多様性は創造者の創造行為の能動性の強調だけでなく、その力そのものの強調もあるのではないだろうか。

17) *ibid.*, 1, 5. 「造られたこの世」が「人間の魂の教育の場所であり学校である (διδασκαλείον καὶ παιδευτήριον τῶν ἀνθρωπίνων ψυχῶν)」という表現も、この「呼びかけられている我々」の任務を表すものと考えられる。

う<sup>18)</sup>。a fortioriの論法を使って、バシレイオスは、人間の地位や価値を捉え直すよう求めるのである。この捉え直しへの「勧告 (προτροπή)」は、先ず万物への反省から始まり、次に万物の中の人間への反省へと進む。「神の摂理」は、ただ静的な宇宙の秩序的な把握だけでなく、人間の救済の史的展開を視野に入れた秩序的な把握をも包みこむものとなる。

## 結 語

我々は、アウグスティヌスにおける「神の摂理」論を構成する言説「画家としての神」を手がかりにして、それをストア派の自然学的洞察と照らし合わせ、そこで対応する箇所を確認した。更にバシレイオスの創世記解釈を通じた「神の摂理」の言説を部分的に見ることで、直接的な影響関係は措いておくとして、少なくとも神義論的トポスとして、ストア派のそれとの連続性を見いだせる箇所を確認した。このように、ストア派の自然学がもっている神義論的方位が、東西教父思想の倫理的方位と連動する思想の水脈を見ることができるのである<sup>19)</sup>。

---

18) *ibid.*, 1. 7. 「(技芸には制作的、実践的、観想的とあるが) 制作的技芸の場合は、制作活動をやめても、その作品は残るのである。例えば、建築術や大工の技、銅細工術、機織り術の場合である。こういった術は、その作者がその場にいなくても、これらの術そのものの中に作者の考えを十分にあらわして、これらの術の成果によって建築家や細工師や機織りに対する讃美を呼び起こすのである。従って、世界が技芸によってつらえられたものであり、すべての人によって観られ、これを通じて世界を造った方の知恵を認識するために目の前に据えられていることが理解されるようにと、あの賢者モーセは世界について他でもない『初めに神が創造した』という言葉を用いたのである」。

19) 2009年度大会シンポジウム連動特別報告では以上の考察に基づき、更にアウグスティヌスにおけるストア派思想の問題として、『秩序論』と『神の国』を、「神の摂理」論を中心に比較し、そこから神義論的言説が「信」の道を導くものであることを示した。これは自由意志論と決定論の問題と深く関わるものである。また、ストア派の「不動心」に関連して、アウグスティヌスによるストア派の「善き感情」批判の文脈を考察し、ストア派と違って感情を肯定的に扱う思想も『神の国』において示した。これらについては別稿にて論じることにした。